

【慣用句】 資料集

合いの手を入れる 相手の動作や話の合間に 挟む別の動作や言葉。○「相槌を打つ」
明るみに出る 知られていなかったことや隠されていた 事実が、世間に広まる。公になる。
朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり 朝に人として生きるべき道を聞いて会得したなら、

その日の夕方に死んでも悔いはない

雨だれ石を穿(うが)つ 小さい力でも根気よく長期間努力すれば、成功するということ
怒り心頭(しんとう)に発する 心底怒る事 ×「怒り心頭に達する」
石に漱(くちすす)ぎ流れに枕す 負け惜しみが強くて、自分の間違いに屁理屈をつけて正当化すること
衣食足りて礼節を知る 人は生活に困ることがなくなって初めて、礼儀節度を気にかけて重んじるようになるという事
一日(いちじつ)の長 知識・経験・技能などが少し優れていること。年齢が少し上であるということ
一矢(いっし)を報いる 相手の攻撃に反論や反撃を加えて、わずかでも返しをする
一頭地(いっとうち)を抜く 多くの中で一段と優れている。傑出する。
いやがうえにも いよいよ、ますます
殷(いん)鑑(かん)遠(とほ)からず 戒めとなる手本は、ごく身近にあるということのたとえ。
うがった見方 物事の本質を的確にとらえた見方
氏より育ち 家柄や血筋といったものより、環境や育てられ方の方が人間形成に深く関係するという事
腕(うで)に縊(よ)りをかける 自信ある腕前を十分に発揮すること
瓜(うり)の蔓(つる)に茄子(なす)はならぬ 平凡な親から非凡な子は生まれにくいこと。原因のないところに結果は生じないということ
江戸(えど)の仇(かたき)を長崎(ながさき)で討(う)つ 他の所や全く別のことで昔の恨みを晴らす。
縁(えん)は異(い)なもの味(あじ)なもの 男女の結びつきはとても不思議なもので、うまくできているということ。
押しも押されぬ 名実ともに優れていること ×「押しも押されぬ」
同じ穴(あな)の貉(たぬき) 一見関係がないようでも実は同類・仲間であることのたとえ。
恩(おん)に着(き)せる たいしたことでもないのに、ことさら相手のためにしたかのように言うこと
灰燼(はいせん)に帰(かえ)す 跡形もなくすっかり焼けてしまう事
垣間(かいま)見る 物のすきまから、こっそりとのぞき見る。
風(かぜ)が吹(ふ)けば桶屋(かづま)が儲(たか)かる 思いもかけないところに影響が及ぶこと、あてにならないことに期待すること
語る(かた)るに落ち(お)ちる 問い詰められるとなかなか言わないが、勝手に話させるとすっかり秘密をしゃ

べってしまうこと

- 瓜田(かでん)に履を納れず、李下に冠を正さず 他人から疑われるような行動はするものではないということ。
- 禍福は糾(あざな)える縄の如し 幸福と不幸は、より合わせた縄のように交互にやってくるということ。
- 韓信(かんしん)の股ぐり 将来の大きな目的を達成するために、恥辱を受けても我慢して耐え忍ぶこと
- 汗馬の労 あることのために広く駆けずり回る苦勞のこと。
- 雉(きじ)も鳴かざば打たれまい 余計なことを言ったばかりに、自ら災いを招くことのとえ気が置けない 気づかいする必要がない。遠慮がいらぬ
- 九死に一生を得た ほとんど助かる見込みのない危険な状態から、かろうじて助かること。
- 麒麟の躩(く)き 優れた人も時には失敗をするという意味＝河童の川流れ、弘法にも筆の誤り口さがない 口うるさい。他人の噂や悪口を無責任に言うこと
- 葷酒(くんしゅ)山門に入(い)るを許さず 臭い野菜と酒は仏道修行の妨げとなるので、寺の門から中に持ち込んではいけないということ
- 鶏口(けいこう)となるも牛後となるなかれ 大きな集団の中で尻にいて使われるよりも、小さな集団であっても長となるほうがよい。
- 新規蒔(ま)き直し
- 恒産(こうさん)なくして恒心なし 安定した生活を持たないと、しっかりと道義心や良識を持つことできない。
- ご自愛(ごじあい)ください 自分の身体を大切にしてくださいの意 ×お身体をご自愛(ごじあい)ください。
- 小晴日和 晩秋から初冬にかけて 現れる穏やかな暖かい晴天。小春＝旧暦 10月
- 三顧(さんこ)の礼(れい) 目上の人がある人物を見込んで、特別に優遇することのとえ。
- 先んずれば人を制す 人よりも先に行動を起こせば、有利な立場に立つことができること
- 鹿を指して馬と為す 理屈に合わないことを、権力によって無理に押し通すことのとえ。
- 舌の根の乾(か)ぬうち 言い終えてすぐに
- 死中(しちゅう)に活(かつ)を求める 窮地の打開策として、あえて危険な道を選ぶこと
- 柔(じゅう)よく剛(ごう)を制す 弱い者が、かえって強い者を負かす事。＝柳に雪折れなし
- 上手(じょうず)の手から水が漏れる どんなに上手な人でも、時には失敗をするということとえ。
＝弘法も筆の誤り、河童の川流れ、
- 自明(じめい)の理 あれこれ説明する必要がない明白な道理
- すべからく (須らく＝必須) 当然、是非とも
- 青天の霹靂(へきれき) 予想もしなかったような事件や変動が、突然起きること。霹靂は激しい雷鳴の事
- 千慮(せんりょ)の一失(いっしつ) どんなに賢い人でも、多くの考えの中には一つくらい間違

いや思い違いがあるということ。

総領の甚六 長男は甘やかされて育ち、弟たちよりぼんやりしていて世間知らずだという事
そうは問屋が卸さない そんなに具合良くいくものではないというたとえ。

他山(たざん)の石 自分の修養の助けとなる他人の誤った言行。

袂(たもと)を分かつ 行動を共にしてきた人とわかれること

忠ならんと欲すれば孝ならず 主君に忠節を尽くせば親には不孝となること

角(つの)を矯(た)めて牛を殺す 小さな欠点を無理に直そうとして、かえって全体をだめにすることのたとえ。

天に唾(つば)する 人に害を与えようとして、かえって自分がひどい目に合うことのたとえ。

伝家の宝刀 いよいよという場合にのみ使用するもの。 ×「天下の宝刀」

鳶(とび)が鷹(たか)を生む 平凡な親がすぐれた子を生むことのたとえ。

螳螂(とうろう)の斧 身の程知らず。弱い者が、自分の実力もかえりみずに強い者に立ち向かうこと。螳螂=カマキリ

取り付く島もない きっかけがつかめないこと ×「取りつく暇がない」

情けは人のためならず 人に情けをかけておけば、まわりまわって、自分のためになること

二足の草鞋(わらじ) 二つの職を持つこと

二の舞を演じる 前の人と同じ失敗をくり返すことのたとえ。

濡れ手で粟 苦労せずに利益を得ること(濡れた手で粟を掴むと沢山手につくことから)

暖簾(のれん)に腕押し 何の張り合いも手ごたえもないことのたとえ。=糠に釘、

馬脚を現す 隠していた本性や悪事がばれることのたとえ。

齒(きぬ)に衣(きぬ)着せぬ 思った通りにずけずけ言うこと

顰(ひそみ)に倣(なら)う 善し悪しを考えず、むやみに人の真似をすることのたとえ

百年河清(かせい)を俟(ま)つ どんなに長い間待っても望みが叶わないこと。(どんなに待っても黄河が清くなることはない)

風馬牛 互いに無関係であること。また、そういう態度をとること。

刎頸(ふんけい)の交わり きわめて親密な付き合いのたとえ。刎頸は、首をはねること。

臍(ほぞ)を噛む どうにもならないことを悔やむことのたとえ。

枚挙(まい)にいとまがない 数えられないほど沢山ある

眉(ひそ)を顰(ひそ)める 心配や不安を感じ、表情に出すこと。 ×「眉をしかめる」

胸三寸(むねさんずん) 胸の中。また、心の中にある考え。

野(や)に下る 主に選挙に落選した政治家がただの民間人になることをいう。

病(やまい)膏肓(こうこう)に入(い)る 趣味や道楽に熱中しすぎて、どうにも手がつけられなくなること。

夜も日も明けない それがないといつときたりとも過ごすことができない。

累(つら)を及ぼす 巻き添えにして迷惑を及ぼすこと。